里川研究掲示板

当センターでは、「里川」というコンセプトについて研究活動を開始いたします。
このコーナーでは、活動動向を随時お知らせしてまいります。

共同研究「里川」を開始

ミツカン水の文化センターでは2004年度より、共同研究『里川』を開始いたします。1年目は「里川とは何か」と題し、里川についての概念設計を行います。フォーラムのテーマセッションに登壇頂いた各研究者を応援団に、研究経過を随時報告して参ります。

「水の文化交流フォーラム」開催 人、それぞれの里川があった

2003年10月20日に水の文化交流フォーラム2003
なぜ いま 里川なのか
コンパクトシティを考える
を東京にて開催いたしました。里川研究のキックオフとなるフォーラムです。
概要版を現在センターホームページにて公開しておりますが、まもなく詳細版も公開する予定です。

【特別講演】
「水に対する感性の歴史」
アラン・コルバン　ソルボンヌ<パリ第1>大学教授
コメンテーター：高橋裕　国際連合大学上席学術顧問・東京大学名誉教授

【テーマセッション】
「なぜ里川とコンパクトシティか？」
陣内秀信　法政大学工学部教授

「セーヌ川も里川だった」
嘉田由紀子　京都精華大学教授、滋賀県立琵琶湖博物館研究顧問、水と文化研究会世話役、子どもと川とまちのフォーラム代表

「バーチャルウォーターが結ぶ里川と世界の水問題」
沖大幹　総合地球環境学研究所助教授、東京大学生産技術研究所助教授（併任）

「都市の水辺遊びからつくる里川」
鳥越皓之　筑波大学社会学系教授

【パネルディスカッション】
「里川の文化モデルとコンパクト社会」

「なぜ いま 里川なのか」をめぐり行われたテーマセッションでは、里川をテーマに4名の報告者がプレゼンテーションを行った。

陣内秀信氏は、エコロジーと歴史の観点からの都市づくりが必要であることをまず訴えた。その視点から見るならば、東京は実は巨大な村とも呼べるものであり、集まっているコミュニティの多くを川が結んでおり、川を中心にそれらを再生すればコンパクトシティ像まで辿れるのではないかと論じた。その意味では、それぞれの地域で「里川」がもつイメージの喚起力は見逃せないと指摘した。

嘉田由紀子氏は、水の供給系（動脈）と排出系（静脈）を共に把握しないと、水への総合的な関わりが難

アンケートに寄せられたコメント

◆里川ということをイメージすることでまちづくり、地域づくり、環境問題へと広く関わることができることを認識できた。決して、川の領域だけの話ではないことが理解できた。

◆河川に対する新しい視点が与えられた。

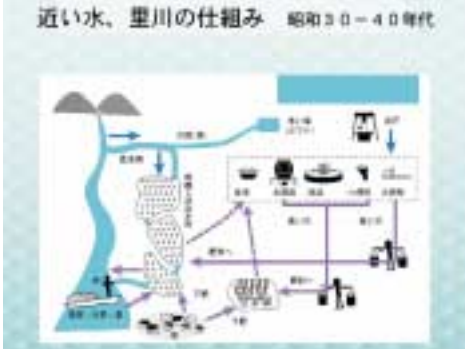
◆水道ができたことで井戸端がなくなり、人々の生活が変化してしまったというが、このフォーラムで取り戻せる人々の距離を感じた。所有の逆転、住民が地域の管理主体可能になるといい。主体を取り戻さなくてはいけない時代がめぐってきたのだろうか。

◆住人が仮の住居に一時的に必要にせまられて住んでいるように、『ふるさと』としての愛着を持てるコンパクトシティを地域の住民が作り上げられると思う。

◆公共事業に社会的合意形成の動きがある昨今の国内において、「里川」という動きは、住民にとっても一番身近なテーマであると思う。

◆里とは何か、もう少しつっこんでほしかった。「ふるさと」の歌に代表される、のどかな、なつかしいイメージだけでよいのか。里川はいったいどこを目指しているのか、これからも追求してみたいと思う。

◆里川とコンパクトシティに共通するものは、物質や生命がうま



しいということを踏まえると、上下水道との関わり方は文化面でも重要であることを唱えた。さらに、人と水との物理的、心理的、社会的距離が離れてしまった現在、川とどのように距離感を取り戻すのかが問題であり、「見ること」が強調される現代社会における、水との対し方も課題であることを訴えた。また、水には怖さもあり、それを里川思想の中でどのように位置づけるのかが課題であることも付言した。

沖大幹氏は、ヴァーチャル・ウォーター論の説明を行った後、里川を考える際に、「～に役立つから愛す」のではなく、里川だから愛するという関係、つまり、川よりも、川と人の関係が重要と報告。自分が川と密接な関係を結び、共にその川を愛するという思いやりが大事であり、そのためには、目に見えない川の価値に思いをはせ、大勢の人が川を物語るのが必要条件であることを指摘した。現在水に困っている人、将来の世代など、今触れられない水を考えることが必要であり、それには感性の問題を避けて通れないと述べた。

鳥越皓之氏は、コミュニティが豊かになると川に愛着がわき、川を利用し川に関わることでコミュニティを豊かにすることもできるという構図について報告した。さらに、所有権というものは、処分権と利用権から成り立っており、多くの地域で、住民が川の利用権を実質的にもつことにより、現状では行政等がもつ処分権を浸食し、所有の逆転と呼べる現象が起きていることを報告。ここをしっかりと押さえれば、後に政策、価値観、文化などの変化が追いついてくると述べた。

・・・

この日は熱のこもった討議が行われ、参加者も２００名を越す盛況となりました。「里川」は、「里山」の概念を意識した新しい言葉。一見馴染み深く感じるものの、実は各自が違ったイメージを抱いている言葉です。それだけに、フロアからの発言もそのような思いを反映したものとなりました。参加者アンケートに記入いただいたコメントをいくつか下に紹介します。

里川とは、みんなで守る居住地に近い川。ならば、農村部だけではなく、都市にこそ里川はあるべきだし、そのような里川像も構築していかなくては、というのがこのフォーラムでのセンターからの問題提起でした。

質問、コメントとも、里川の「里」の意味に集中していることがわかります。いわゆる農村の二次的な自然利用空間として川を捉えている人もいれば、あるべき都市モデルとして里川に可能性を感じた人もおり、まさに各人にとっての里川があるといってもよさそうです。

アラン・コルバンを囲んで左より陣内秀信、鳥越皓之、嘉田由紀子、沖大幹の各氏

大事なことは、「自分が暮らす居住地と生活の中で、川を総合的に位置づけよう」という願いです。この点については会場のみなさんと共通のスタートラインに立っていることを、ひしひしと感じさせられたフォーラムでした。

◆「都市と農村の共生」が唱えられ、国民の農的生活への動きが高まっている中で、都市における農的生活の推進が重要と考えているが、里川、コンパクトシティがその方向にあることをうれしく思った。

◆長年産業界に身を置いてきたが、自然・地球・生命に対する加害者でなかったか？　という自責から、里山・里川・環境について考えていきたい。

◆里川を都市から見るということは逆転の発想だと思った。私の住んでいる小石川はもう消えてしまったし、銭湯、豆腐屋も少しずつ減っていく。だんだん「水の風景」が消えていくようで寂しい気がする。

く循環し、その循環が見え、その循環にかかわっていることと思う。

※本報告はフォーラムの紹介です。事務局の責任でまとめた概要版は、当センターホームページにも掲載しています。また詳細報告もまもなくホームページにて公開いたします。

http://www.mizu.gr.jp/

「あなたの里川」情報をお寄せください。
FAX：03-5762-0246

水の文化交流フォーラム2003
【特別講演】

右：アラン・コルバン氏
左：高橋裕氏

アラン・コルバン氏は「水に対する感性の歴史」と題し、西欧における水についての様々なイメージや、それが人間の欲望や感性にどのような影響を及ぼしたのか報告された。それは現代の日本人が日頃気が付かない豊かな「水のイメージ」を思い起こさせる内容で、A～Hがその報告項目である。

A 水の形態

①形のない水で雲やもや、霧等、②露となって地面における大気の水分、③雨で、人間を直接大気現象の力に結びつけ、植物や人間の内面性を生き返らせる源。

ガストン・バシュラールが行った分類では、①恩恵をもたらす流れる水、②激しく流れ下る暴力的な水、③どんよりした澱んだ水と分けられた。

西洋思想の歩みにおいて河川が流れるイメージとして、蛇行して流れるものが人々を魅了してきた。「万物は流転する」というように西洋思想を構成している時間概念をも規定している。

また、川の流れと人体内を循環する体液が同質という意識もあった。

暴力的な水は、大量の雨、雷雨、嵐による激しい洪水を想像させる。それは、人間が克服しなければならない、我々自身の闇の部分へ意識をむかわせる。西洋以外にも多くの文明で見られる洪水エピソードは、水が引いた後の大地への不安や秩序を想像させる。古代ギリシャ思想でも、宇宙開闢論において根元的な水の役割が述べられている。要は、西洋文明圏では、根元的な水が世界の秩序に先立つ混沌を表現している。

B 物質としての水

西洋人は人が水を飲むとどういう結果になるか常に配慮してきた。紀元前6世紀に価値の序列が確立した。トップは雨水。第2は泉の水、そして井戸水、河川水、湖水、沼の水と続く。

水に関する古い料理術によれば、水の価値は等しかったわけではない。野菜をおいしく茹でられるか、パンやビールを作るのに適していたかどうかによってそれぞれの水の価値が決まっていた。

水は調理されるもので、そのまま飲まれることは希だった。何世紀もの間、乾きを癒す水は、慎重に飲むべきと考えられており、水をたくさん飲むことは危険を伴うとされていたし、たくさん飲む人は奇妙で怠惰な人間と見なされていた。

西洋では、19世紀になると飲料としての水をめぐる言説に取って代わって、科学的・細菌学的言説が支配的になった。

C 恩恵をもたらす水

西洋では常に泉を称えてきた。泉の水は生命を維持し、若さを保つ力があるとされていたからだ。泉は純潔と処女性を象徴している。泉の水が具現しているのは、自然の恵みと豊かさで、大地の恩恵である。

西洋の歴史において、恩恵をもたらす水は、それを称える美学と切り離せない。古代以来、都市の繁栄、富、美しさを示す泉は不可欠だった。

温泉療法など、人を癒す水も2千年にわたり存在してきた。

D 災いをもたらす水

西洋で沼への恐怖がピークに達したのは18世紀だ。南イタリアのような地中海沿岸の沼地は、地獄の光景と考えられていた。澱んだ水はしばしば呪いと結びつけられ、滞った水には不吉な力があると信じられていた。19世紀、澱んだ水に対する不安感は、コレラの原因が水にあるという確信によって一層あおられた。

E 水と聖なるものとのつながり

水には浄化する機能と倫理的な価値が備わっている。キリスト教にとって水とは洗礼の水だ。洗礼の水は、洗礼志願者をキリスト教徒に変貌させるもの。

原始キリスト教がもつ泉のもつ治癒力に注目し、それを神聖なものとしたが、治癒力は病を治す聖人への信仰に結びついている。さらに、信者が教会に入る時、人を浄める聖水が使われる。悪魔は聖水を嫌う。

F 水とエロス

水はエロティックな意味ももっている。爽やかな水と若い女性のみずみずしさの間には暗黙の対応がある。人々の想像力の中で、母親的な水から女性的な水への転移が起こったらしい。西洋の造形芸術が水と結びついた女性のヌードを表象することにより、水は男の欲望の激しさなどに結びつけられる。19世紀後半の画家は、女性が身体を洗ったりする時の動作や姿勢を好んで描いた。西洋では、水が女性の肉体を想像させる。

G 活動の源としての水

西洋の歴史において、水は運動と労働を補助するものだった。10世紀から12世紀にかけて、都市化の過程で水は重要な役割を果たした。水がなければ、粉ひきも機織りも染め物もなめし皮職人もありえなかった。中世では、水の動力の統制と水力エネルギーの活性化は、開墾作業や都城の建設と並行して行われた。

水車や製粉業は、流れ落ちる水と、濁った水ということで、「恩恵をもたらす水」と「不吉な水」という二元性を帯びている。

H 水が欲望や夢、感性に及ぼした影響

ルソーの小説『新エロイーズ』で明らかなように、湖の波に揺られることが独特のエロティシズムを喚起するようになる。ヴェネツィアでは、イルミネーションで飾られた人工の池を舟で遊覧するという貴族の遊びにとって代わり、男女の出会いの場が出現した。出会いのはかなさは、波の揺れ、転覆の危険、島や放浪に特有の放縦な雰囲気によって一層強められた。

19世紀半ばからミネラルウォーターを家庭で飲むことが流行していく。水の清潔さや循環に関するあらゆることに人々は敏感になる。都市では井戸や泉を巡る争いが増える。水に対する新しい欲望が映し出しているのは、公的なものと私的なものの境界線が厳密になってきたこと、環境の悪化に対する許容度が全体的に変化してきたことに他ならない。

人間の矮小性を感じさせる崇高美の規範について言えば、海の方が河川や湖よりも適している。それに対して河川や湖は、かつて自然美を表現するのに根本的な要素だった。

現代では、水は主に科学と分析の管理対象になった。しかし、水にまつわる魅力がまったく無くなったわけではない。水は未だに様々な信仰と幻想と、そしてとりわけ夢を支える触媒である。

この報告に対して、コメンテーターを務めた高橋裕氏は、現在日本人の価値観が変わりつつあるが、本来日本人は和歌、俳句に見られるように、水への感性が鋭敏だったことを指摘し、近代河川技術に川への感性を取り戻すべきを訴えた。